

乳幼児期におけるふりの発達に関する検討
—母親の働きかけから子ども主体のふりの確立へ—

心理学研究科心理学専攻 伴 碧

要約

幼児期におけるごっこ遊び(“group pretend play”または“social or collaborative pretend play”)は、名前の通り複数の子ども同士で行われる遊びであり、他者の行動から意図や感情を推測する能力である心の理論の獲得を促すために重要である。したがって、ごっこ遊びを展開する上で、高い社会性やコミュニケーション能力が求められる。そのため、他者とコミュニケーションを取ることが苦手な子どもの遊びのなかで、ごっこ遊びはほとんどみられない。また、ごっこ遊びは本来子ども同士で行われる遊びであるため、保育者など大人の介入が難しいとされている。

そこで本研究では、ごっこ遊びの発達の前段階であるふり遊び(pretend play)に注目した。子ども同士で行われるごっこ遊びとは異なり、18 ヶ月児からはじまるふり遊びは、大人と子どもとの間で行われる。そのため、大人による介入がしやすいというメリットが挙げられる。また、ふり遊びそのものが、子どもの発達にとって重要であることも指摘されている。以上の理由から、ごっこ遊びの土台となるふり遊びに注目することにより、ごっこ遊びへの円滑な移行が可能となるだけでなく、ごっこ遊びをすることが苦手な子どもの支援にもつながると考えられる。なお、本研究では、“ふり”とは、物Aを物Bの代用品として用いる、または、人物Aが人物Bの役割を引き受け行為する、あるいは状況Aがあたかも状況Bであるかのごとくみなされて、それらの条件のもとで特定の行為が演示されることを指す。

ふり遊びは現在までに、母親など身近な大人からの働きかけにより促されるという立場と、子どもは18 ヶ月までに萌芽的な心の理論を獲得しており、その初期の現れとしてふりが表出されるという異なる2つの立場から研究がなされている。しかし、どちらの立場がより有力なのか未だに結論は出ていない。そこで本研究ではまず、両者の立場からの検討を行い、18 ヶ月児のふりには、萌芽的な心の理論の獲得、あるいは母親の働きかけのどちらの要因がより強く影響を及ぼすかについて検討を行った。

研究 1-1 では、萌芽的な心の理論を獲得している18 ヶ月児の選定を行った。次に、研究 1-2 では、ふりにおける大人の働きかけ(以下、ふりシグナル)について、ふりシグナルの同定を行った。その結果、ふり遊びにおける具体的なふりであるふり行動(e.g., 空のコップに水が入っているかのように飲む行動)や、笑顔、オノマトペ(擬音語・擬態語)が同定された。そのうえで研究 1-3 では、子どもの萌芽的な心の理論の獲得と、母親のふりシグナルのどちらが18 ヶ月児のふりに対して相対的に強く影響を及ぼしているか検討を行った。その結果、18 ヶ月児のふりに強く影響を与えていたのは、萌芽的な心の理論の獲得ではなく母親のふりシグナルであることが示された。しかし、その影響は負であった。つまり母

親のふりシグナルが少ないほど、18 ヶ月児はふりを多く行うことが示された。

子どもは大人からの働きかけによって、ふりを発達させていく。実際、母親が積極的に遊びに介入したほうが、子どもの遊びが促されることが指摘されている (e.g., Belsky, Goode & Most, 1980)。しかしその一方で、母親は子どもの遊びを促すために、積極的な関わりではなく、子どもの遊びの発達に合わせた補助的な役割をとることもまた指摘されている (戸田, 1996)。研究 1-3 では、母親の働きかけが少ないほど子どものふりが多かったという結果が示された。これは、研究 1 の対象が、萌芽的な心の理論を獲得していた 18 ヶ月児であったことから、母親が積極的な介入をせずとも、子どもが十分にふりを行っていた可能性が推察される。そのため母親は、子どものふりの発達に合わせて補助的な役割をとっていた可能性がある。

そこで、研究 2 では、子どものふりがピークを迎える 30 ヶ月まで対象を広げ、子どものふりの発達に応じて、母親はふりシグナルを変化させるかについて検討を行った。その結果、子どものふりは 18 ヶ月児よりも 24 ヶ月児、30 ヶ月児において増加したが、母親のふりシグナルはそれに伴い減少していた。つまり母親は、子どものふりの発達が未熟な場合には積極的な働きかけを行い、その後、子どものふりの発達に応じて自らの働きかけを補助的なものに変化させていることが示された。

しかし研究 2 は、月齢における母子それぞれの行動の変化を検討したに過ぎないため、必ずしも、母親が子どもに応じてふりシグナルを変化させていたとは言えない。そこで、研究 3 では 18 ヶ月児、24 ヶ月児、30 ヶ月児を対象に、子どものふりを促すための要因である大人側のふりシグナルが、実際に子どものふりに影響を及ぼしているかについて、ふりシグナルの有無を操作することで要因を統制した実験的検討を行った。その結果、ふりシグナルは 18 ヶ月児、24 ヶ月児のふりの出現を促していることが明らかとなった。他方、30 ヶ月児になるとふりシグナルは子どものふりに影響しないことが示された。つまり 30 ヶ月児は、ふりシグナルの有無にかかわらず、ふりという状況を理解し、ふりが出来ることが示唆された。

だが、研究 3 では、ふりシグナルの有無のみを操作したため、個々のふりシグナルの効果については検討できなかった。そこで、研究 4 では、18 ヶ月児のふりを促す具体的なふりシグナルについて、ふり課題を用いて検討した。その結果、18 ヶ月児のふり課題の成績に正の影響を与えていたのは、ふりシグナルの中でも、ふり行動、オノマトペであることが示された。

本研究から、大人のふりシグナルは、18 ヶ月児および 24 ヶ月児のふりを増加させることが示された。また、ふりシグナルのなかでも、ふり行動、オノマトペを用いることが子どものふりを促す上で有効であることも示された。他方で、30 ヶ月以降になると、大人のふりシグナルがなくても、子どもはふりが出来ることが示された。つまり、乳幼児期のふりの発達について、大人からのふりシグナルを提示されることにより、子どものふりが促される段階 (18 ヶ月から 24 ヶ月) と、子ども自らがふりの主体となり、大人のふりシグナル

がなくても自発的にふりを行うことが可能となる段階（30 ヶ月以降）の2つの段階がある可能性が示唆された。30 ヶ月という月齢は、母子のふり遊びから、仲間とのごっこ遊びに移行する時期である。子どもが主体となったふりを展開する上で、母親は積極的に働きかけを行うのではなく、働きかけを減らし、補助的な役割へと自身の行動を変化させることにより、子どものごっこ遊びへの移行が円滑に行われることが考えられる。

(2649 文字)